

群馬県総合教育センター 幼児教育センター ぐんま幼児教育センターだより

第44号 令和4年10月

持続可能な幼保小連携の推進を

群馬県総合教育センター 所長 黒澤 英樹

総合教育センター所長の黒澤と申します。皆様には日頃より、総合教育センターの事業にご協力いただき、心より感謝申し上げます。

さて、私はこれまで小学校1年生の担任を2回経験しており、特に2回目の担任、平成9年度は、学校の近くの幼稚園と様々な連携をさせていただきました。

例えば、生活科でおもちゃ作りをするにあたり、「おもちゃを作って幼稚園の子供たちに楽しく遊ばせてあげよう」というめあてのもと、1年生と幼稚園の子供たちを交流させたことがありました。この時に幼稚園の先生から「幼稚園の子供たちは場所が変わると緊張する場合がありますので、1年生に園に来てもらえますか」「年長だと1年生より上手に遊べてしまう子もいるので、年中との交流がいいと思いますよ」とアドバイスをいただいたことを思い出します。交流の日、1年生の子供たちは、すっかりお兄さんお姉さんになり、生き生きと活動していました。

また、幼稚園の先生から、年長の子供たちに学校の授業を見せてほしいと依頼されたことがありました。どういう授業が良いか考えましたが、算数の図形の授業を見てもらいました。当時どの学校にもあったOHPを使って影絵のように積み木の側面を投影し、どの積み木の影かを当ててのです。1年生にとっては、立体を構成している面の形に気付かせるための立派な勉強ですが、幼稚園の子供たちも楽しかったようで、後で園の先生から、「学校の勉強が楽しみだと言っていた」「自分も手を挙げたかったと言っていた」などと、嬉しい感想をいただきました。

平成9年度という、まだ幼保小連携などという言葉は聞き慣れていない時代です。しかし、偶然幼稚園が近くにあったこともあり、このように子供たち同士の交流ができたこと、そして何より、幼稚園の先生方と色々な話ができたことは、私にとって大きな財産になりました。

残念なことに、令和元年度の2月頃から新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい始め、学校は臨時休校となり、幼稚園との交流もストップし、子供たちの情報交換も紙上になるなど、大きく状況が変わり現在に至っています。

新型コロナの感染状況、教職員の多忙化解消、行事の削減など、大きな壁が立ちだかる中、幼保小の連携を今後どのように形作っていくのかは、大きな課題です。しかし、幼稚園の子供と交流する1年生の生き生きとした姿、学校を楽しみにする幼稚園の子供たちの姿などを思い出すと、大きな壁を乗り越えて、持続可能な幼保小連携の形を模索する必要があるのだろうと考えています。

「ぐんま幼児教育センター
だより第44号」をお届け
します。

1ページ：「群馬県総合教育センター所長による巻頭言」
2ページ：「今年度の研修講座について」
3ページ：「今年度の夕やけ保育研修会について」
4ページ：「幼児期の教育コラム」

今年度の研修講座について

＜10月27日現在の状況＞

今年度はコロナ禍の中、研修講座の内容や講義のねらいに応じて、集合研修とオンライン研修を使い分けての研修となりました。オンライン研修に参加された先生方も、ICT機器の操作に慣れてきており、それぞれのよさを生かした有意義な研修となりました。

幼稚園等3年目経験者研修

・研修日数：1日（オンライン1日）

＜受講者の声＞

3年目の教諭として自分が何をすべきなのか自分自身で理解しきれていなかったのが、3年目に求められる資質能力を自覚し、自己研鑽を重ねていきたいと思う。

幼稚園等新規採用教員研修

・研修日数：7日（集合2日 オンライン5日）

＜受講者の声＞

普段、表面的な幼児の姿に目を向け、目に見えている部分で問題解決を図ろうとしていたことに気がきました。幼児の困り感に思いを寄せる必要があると認識でき、今後の保育の方向性を見直す機会となった。

新任幼稚園等園長研修

・研修日数：2日（集合2日）

終了

＜受講者の声＞

自園の課題について、参加者同士が直接情報交換できることは、たいへん有意義であると感じました。特に、幼保小の接続については本園の課題としたいので、今後も情報交換・共有をしていきたい。

幼稚園等5年経験者研修

・研修日数：2日（オンライン2日）

＜受講者の声＞

色々な園の先生方の課題や手立てを知ることができ、自分の保育を振り返りながら協議をすることができたのがとてもよかった。また、自身の課題も、複数の先生からの意見を頂いたことで視野が広がった。今日の研修を日々の保育に生かしていきたい。

新任幼稚園等副園長・教頭研修

・研修日数：1日（集合1日）

終了

＜受講者の声＞

実際にシュミレーションすることで、感じられることもあり、貴重な体験だった。立場が変わったことで、責任の重みを感じているが、園の運営、先生方への関わりなど、できることから、今日勉強したことを自分なりに整理して対応していきたい。

幼稚園等中堅教諭資質向上研修

・研修日数：6日（集合1日 オンライン5日）

＜受講者の声＞

自分の実践に対して、他園の先生方から認めてもらい、たいへん嬉しく思った。同じ経験や感想をおもちの先生もいたことで一体感が生まれ、今後の実践への意欲にも繋がった。

他園の事例を見て、自園でも真似したいと思うところがたくさんあり、参考になった。

幼児教育研修講座

・研修日数：1日（オンライン1日）

終了

＜受講者の声＞

「5領域のねらい・内容」と「育みたい資質・能力」と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の関係性について、今まできちんと理解しきれていなかったのが、講義を受けてスッキリした。今後の保育に生かしていきたいと思った。

今年度の夕やけ保育研修会について

<10月27日現在の状況>

今年度はオンラインで6回の研修を企画し、残り2回となりました。各回に、たくさんの皆様のご参加をいただき、感謝申し上げます。4回の研修参加者の合計は、60名ほどになりました。

今年度も、複数の回にお申し込みいただいている方が多くいらっしゃいます。オンライン研修ですので、どなたもお気軽にご参加ください！以下に受講者の声を掲載します。

保育Café 「くっチャベリ亭」

終了

環境の構成ということで、いろいろなアイデアをいただけてとても参考になりました。また、お茶を飲みながらカフェ感覚での研修ということで、初めての参加でしたがとても楽しく話をすることができました。

(6月28日開催)

日頃の悩みを伝える場として、人数も時間も適していたと思います。私自身の悩みに合ったアドバイスとして、「子どもが変わると親が変わる！」というフレーズに納得してしまいました。

(9月1日開催)

発達理解と保育

保育者がルールを全て引くのではなく、失敗しても先生がいる！チャレンジする！という感覚を子どもがもてるような保育を行っていきたくと思いました。

保育者が色んなところにアンテナを張って可能性の幅を広げ、チャレンジすることで、いつもの遊びをちょっと違う遊びにしたり、いつもより楽しいかもと思ってもらえたりする工夫を心がけていきたくと思います。

(8月23日開催)

次回開催：

11月15日 15:10～16:45

講師：

群馬大学大学院 保健学研究科
講師 十枝 はるか 氏

演題：気になる幼児の理解と対応
ティーチャー・トレーニングを
とおして

お申し込みは
こちらから！



募集中！

夕やけ保育研修会 特別講演会

募集中！

日時：12月26日(月) 14:30～16:30

講師：北海道大学大学院 教育学研究院 准教授 川田 学 氏

演題：個人を尊重しつつ、「つながり」を育む保育の役割

川田 学 氏の著書の一部を紹介します。
『保育的発達論のはじまり—個人を尊重しつつ、「つながり」を育むいとなみへ』
ひとなる書房(2019)
『乳児期における自己発達の原基的機制』
ナカニシヤ出版(2014)

お申し込みはこちらから！



幼児期の教育コラム

「ジャンケンで決める」

「ジャンケンでしか決められないん？(決められないの?)」
「ほんとにそれでいいんかい？(本当にそれでいいの?)」



これは私が幼稚園で担任をしていたとき、“もめ事”の際に幼児に掛けた言葉です。幼児が自分たちで“もめ事”の解決を図ろうとしているのだから、なぜそのようなことを言うのかなあ、自分たちで生活していこうとする素晴らしい姿ではないか、などと御批判もありそうです。

「ジャンケン」は、ロジェ・カイヨワの言う「アレア(運や賭けを伴う遊び)」であり、偶然性の内に面白さがあります。「あっち向いてホイ」にはなくてはならないものですし、「かくれんぼ」「鬼ごっこ」の鬼を決める際にもたいへん有効な手段です。サッカーのゲーム前のコイントスのように、異議を言う者はいないと思います。

“もめ事”は、幼児の日常の中にあります。意見の食い違い、役割の決定、ものの取り合い、順番…等、これを「ジャンケン」で決めることが、平和的で協働的な社会の実現を目指す未来の担い手としての子供たちに積極的に経験してほしいことなのかと、私は自身に問い続けています。

大学に勤務していた恩師と上述のような「ジャンケン」にまつわる私の実践と課題意識について話をしているなかで、次のように伺ったことがあります。「学生は、研究室・ゼミでの役割などをジャンケンで決めようとする。一緒に過ごす仲間であるからこそ、互いの特性やサポートの体制、挑戦する意欲等を念頭に、ジャンケンではない方法を探してほしいと、その都度提案してきたが…」という話です。それぞれが背負っている背景や、そこに至る文脈を受けて進んでいく効率的ではない人間社会の意味について再考するきっかけになったことを記憶しています。

もう20年も前になりますが、小学校の生活科の授業を参観したことがあります。グループで考えたゲーム(この授業では「遊び」と言っていたが、敢えて「ゲーム」と表現する。その意図は、昨年「コラム」を参照)を紹介する授業でした。「タイヤのある場所」をめぐる二つのグループによる「どちらが先に使うか」についての“もめ事”が起こりました。近くにいた先生は「ジャンケンしなさい」と言ったのです。子供たちが、自他の思いや状況に気付き、なんとか前に進むために折り合いをつけたり、アイデアを出し合ったりする貴重な学びの時間が失われた瞬間でした。

次に幼稚園で体験したエピソードを記します。5歳児のAちゃんとBちゃんは、同じ図柄のチラシで紙飛行機を作り園庭で飛ばしていました。一つの紙飛行機が水溜まりに着陸し泥で汚れました。Aちゃんは近くに着陸した汚れていない紙飛行機を自分のものだと言います。Bちゃんはびっくりした表情でAちゃんが主張する汚れていない紙飛行機が自分が飛ばしたものだと言います。二人の会話は言い争いに発展しました。私はそこに2時間ほど関わることになりました。私が留意したことは二つです。一つは、時間が長くなるとBちゃんが諦めて、「もういいよ」と言って去ろうとするのを引き留めること。もう一つは、このままだと互いに相手は自分のことをどのように思って今後の友達関係を続けることになるのだろうか?という問い掛けを様々なアプローチで伝えること。最終的には2時間後、Aちゃんは、泥で汚れたのが自分の紙飛行機であることを話し、私も含めてみんな自然に涙があふれ出し、三人で肩を抱き合いました。

ジャンケンに委ねるのではなく、大人が決めるのでもなく、子供が自分で、自分たちで、「どうか」する。子供と共に悩みながら、この過程の中で何が経験され、何が育ちゆくのかを理解していくことが大事なのではないかと思うのです。子供が「どうか」しようと対象に向かっていく状況づくりは、子供が自分自身の世界を広げようとするにつながら、それこそが質の高い教育なのではないかと、「ジャンケン」を通して思いをめぐらせた話です。